



# みどりの風

平成26年5月1日発行  
校報 第508号  
〔みどりの風 第51号〕  
練馬区立関町北小学校

## 三手の読み

校長 大野 泰弘

今の季節、将棋界では名人戦が行われています。今年度は、森内俊之名人に羽生善治三冠が挑戦しています。1612年、大橋宗桂が徳川幕府に認められ、初代の将棋所(しょうぎどころ)として独立して、一世名人を襲位してから約400年。将棋界は、名人戦を中心に発展してきたことができます。

その将棋の世界に「三手の読み」という言葉があります。これは、故 原田泰夫九段がアマチュアへの普及を促進するために将棋の基本となる考え方として示されたものです。一手目は、自分がどの駒をどのように動かすかを考える、次に、相手方の手番である二手目について、自分の駒の動きに応じて、相手がどの駒をどのように動かすかを予想する、そして、それをもとに、三手目となる自分の手をさらに深く読んでいくというものです。自分の駒を一つ動かすと、相手がそれにどのように応じてくるか、それに対して自分はさらにこうしてみよう、そうするとどうなるのか、それを考えることが「三手の読み」です。

みどりの風ひろばスペシャルの講座でも、講師の田丸 昇 九段がしばしば教えてくださっていますが、私たちのようなアマチュアにはこれを体得するのはなかなか難しく思われます。

でも、この「三手の読み」という考え方は将棋盤の上だけではなく、日常生活においても、物事を考えるプロセスとして活用できます。今年の名人挑戦者の羽生三冠が、あるイベントの中で次のように話されています。

読みというのは、展開を予想する、先を読むということ。その基本中の基本が「三手の読み」というものです。日常生活の中では、一つの選択肢だけを考えるのではなく、二つ以上の選択肢を比較して判断します。三手先を読めばいいのだから簡単ではないかと言うそうではなく、意外なところに死角があると思っています。それは二手目のところ。つまり、自分がしたいことは自分の意思で決められるのですが、二手目では、当然、相手の考えとか物事の状況等を予想して、考えていかないとはいけません。相手の立場になって、相手の価値観で判断しないと、正確な「三手の読み」にはならないのです。ここで間違えてしまうと、その先いくら手を読んでも「勝って読み」となって、意味がなくなってしまうのです。そのようなときに使えるのが「鳥瞰的」(俯瞰的)な方法です。物事を大きな視野で、大ざっぱに捉えてみる感覚的なやり方です。これから先、この方向にいけばいいとか、こういう方針でいけばどうだろうかとか、この戦略でいったらどうなるかといったことが分かって、無駄なことをしないで済む、考えなくて済むということがあります。

この鳥瞰的・俯瞰的な思考というのは非常に感覚的なもので、とても便利なのですが、それにだけ頼ってしまってもいけません。一つ一つ着実なロジック(論理)の裏付けが必要になってきます。その裏付けが「三手の読み」です。

ですから、この感覚的な「鳥瞰的・俯瞰的な思考」と「三手の読み」のロジック(論理)の積み重ねを、車の両輪のようにつなぎ合わせて考えていく、その方が物事を躊躇なく選択する、たくさんの情報の中から適切な「一つの情報」を選択していくときにも役に立つのではないのでしょうか。(TED x TOKYO 講演会より一部抜粋)

さて、学校は大型連休が過ぎると、今月末の運動会に向けて動き出します。学年の活動も、徐々に進められることになるでしょう。一つの行事をどのように進めていくか、その中で子どもたちにどんな力を育てたいのか等々、指導者が着実なロジック(論理)の裏付けをもちながら、「鳥瞰的・俯瞰的な」思考をバランスよく活用して大局的に捉えていく、そんなことを繰り返しながら、「行事で子どもの心を育てる」ことを具体化していきたいと思います。ぜひ、31日の運動会では、子どもたちの見えている姿だけでなく、そこに至るまでの子どもたちや指導者の思考のプロセス、練習のプロセスにもお心を寄せていただけますと有難く存じます。

冒頭述べた今年の将棋名人戦。息詰まるような両者の熱戦が続いており、ここまでは羽生挑戦者が2勝しています。将棋の歴史に必ずや名を残すお二人の対戦。この先も「三手の読み」と「鳥瞰的・俯瞰的な思考」をもとにしながら、将棋のもつ奥深さを伝えてくれることでしょう。